

# 最多タイの3度目V

## 「優勝の予感あった」

1アンダー 71

今田 夢美(38歳、筑紫ヶ丘)



予感があった。「優勝すると思っていました。コースを知り尽くしているし、1年おきに勝っているから。75以内で回れば」。大会前に今田が描いた通りになった。

今大会に初めて出場した2018年(佐賀ロイヤル)ではプレーオフを制し、2年後の2020年(麻生飯塚)では強風の中、頂点に立った。そして今年は2位に5打差をつけての圧勝劇。10年ほど前までは福岡雷山のメンバーで、このコースの特徴を隅々まで理解しており、ここでのベストスコアは67。自信を持って臨み、そして勝った。

ただ、始まりは思いがけない「失態」を演じた。インの10番からのスタートで第1打をチョロ。80ヤードしか飛ばず、このホールをボギーとした。直前に日焼け止めクリームを塗ったのが失敗で、手が滑っ

たのである。「小学6年以來のチョロ。本当に恥ずかしかった」と笑ったが、このミスが今田のハートに火をつける。「チョロをしたので恥ずかしいものは何もない。攻めていこう」と。続く11番ロングで1・2mを沈めてバーディーで取り返し、13番ミドルでもスコアを伸ばす。結局、インは3バーディー、3ボギーのパープレー。後半のアウトを2バーディー、1ボギーの35にまとめた。「今日は(出入りの)激しいスリリングなゴルフ。面白かった」とまた笑った。

自信の裏には体力アップがある。今田は今年6月からパーソナルトレーナーを付けて週3回の下半身強化に取り組んでいる。無酸素運動をみっちり1時間。そのお陰で体重は夏場になると40kgを切っていたのが、今は44kg。ドライバーの飛距離も10~15ヤード伸びて240ヤードと肉体改造の成果がはっきりと出ている。

全国は4度目の挑戦となるが、これまではいい思い出はない。大会は11月に開催され、肌寒くなる頃だけに、腰に持病を持つ今田にはつらい季節。「腰が痛くならないように、まずは体調。マネジメントをしっかりして、攻めてみたいですね。攻めないと面白くない」。過去3回とは異なるプレーが期待できそうだ。

○…結果的には今田のぶっちぎり優勝となったが、今田はインの最終組スタート。そのためホールアウトした中でスコア最上位のプレーヤーは、優勝やプレーオフの可能性が残されるだけに待機する必要がある。今回は76で山岳茉莉依(八女上陽)、山崎愛子(喜々津)、中村いくみ(大博多)、高橋圭子(ワカミヤ)の4選手がクラブハウスで待った。

## 《福岡雷山ゴルフ倶楽部》



